

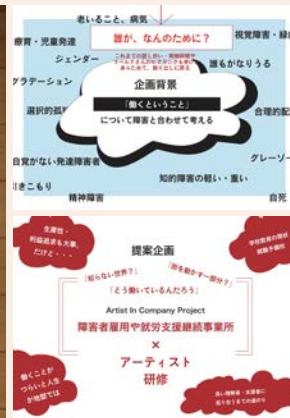
Aグループ 医療的ケア児と養育者のためのアートプロジェクト



医療的ケア児をサポートできるアートプログラム運営者、ボランティアスタッフを育成する「医療的ケア児等支援者養成研修」や医療的ケア児と一般参加者が協働する「クリエイションプログラム」、家族などの養育者が日々の記憶や感覚をテキストにしたり、パフォーマンスに落とし込んでいく「養育者向けプログラム」など、医療的ケア児と家族が家庭や学校、療育や病院以外に時間を過ごすことができるサー

ドバイスをつくることを目指した一連のプログラムを企画。一般の人々と医療的ケア児の交流機会を増やすとともに、各地域の医療的ケア児の支援組織や専門家と連携できる体制を徐々に拡大するプロセスを設計した。Aグループのメンバーの地域から実証実験を行い、取り組みを拡張していくプロセス、予算まで具体的に発表した。

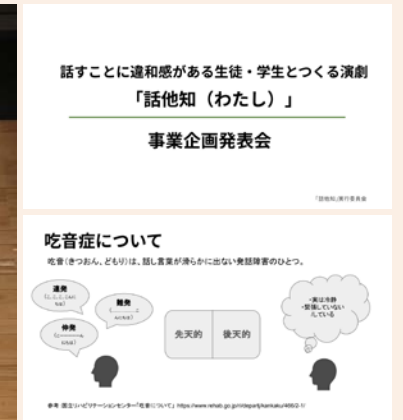
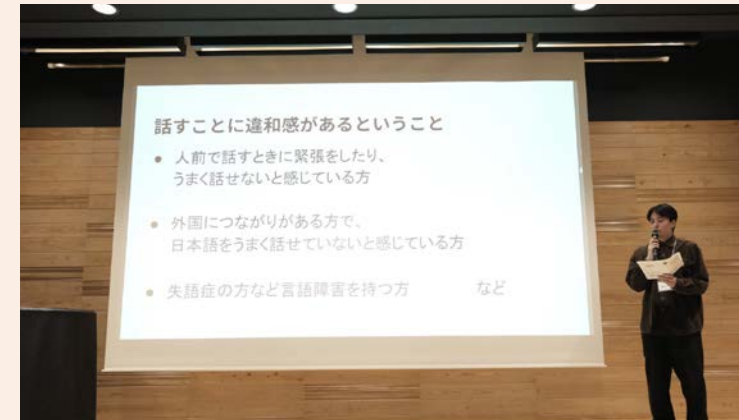
Bグループ 障害者雇用×就労支援継続事業所×アーティスト研修



「誰もが病気になったり、障害のある人になる可能性はある。手帳のあるなしではなく、グラデーション、グレーゾーンに焦点を当てたい。」とした上で、障害者の「働く」ということにフォーカスし、グループメンバーのひとりが暮らす、千葉県市川市を舞台に、企業との連携、障害者雇用の課題に対するアプローチなどを発表した。

実際に市川市でフィールドワークを行い、市川市の課題、環境、観光、文化的資源などにも触れた上で、さまざまなアートという手段を用いたアイデアフラッシュを出していった。アートという手段を通して、普段言えないことや感じている障害をオープンにしやすくなるのでは?と考えていった、そのプロセスを発表した。

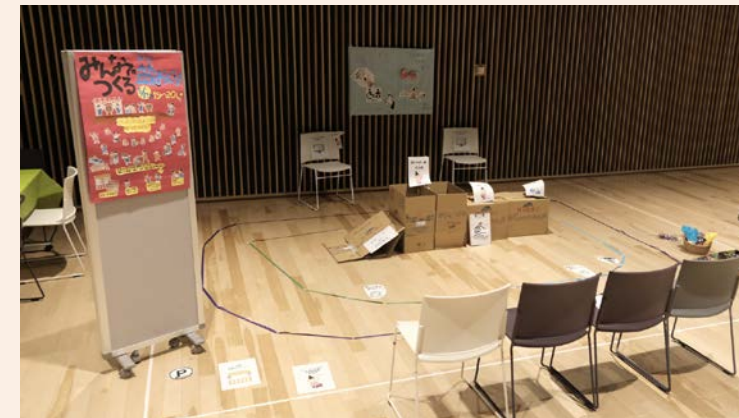
Cグループ 当事者や話すことに違和感がある 中高生・大学生とつくる演劇「話他知(わたし)」



堺市を舞台として、「話すことで他人とともに自分を知る」というコンセプトで考えられた演劇のワークショップ企画。話し言葉が滑らかに出てこない発話障害である「吃音」当事者や話すことに違和感がある方の生活体験の聞き書きワークショップとそれに基づいた脚本による演劇発表を行う。メンバーのひとりが吃音当事者で、その経験や辛かった体

験について他のメンバーが共感したところから、企画のテーマが絞られた。「吃音や話すことに違和感がある人も、言葉による表現を諦めなくていい。」ある意味で、言葉に縛られる演劇だからこそできる場を目指す。

Dグループ みんなでつくるシン・盆踊り



障害のある人も、ない人も誰もがアクセシブルな盆踊りをつくる企画。日本人にとっては馴染みのある「盆踊り」をモチーフに、地域の社会福祉関係の法人、行政、文化財団、盆踊りをやっている自治会や地元企業、教育委員会などを巻き込んだ展開を企画した。都市部のベッドタウンとして、新住民が増え、地域とのつ

ながりが希薄になっている神奈川県茅ヶ崎市を舞台に、年齢や国籍、障害の有無によらず、さまざまな人が盆踊りを通して、一緒にクリエイションしたり、集い交流する場を創出する。日常で出会うことがない人や文化と出会うことを通して、多様な価値観を受け入れられるようにすることを目指す。

企画監修者より



長津結一郎

九州大学大学院芸術工学研究院准教授

多様な関係性が生まれる芸術の場に伴走／伴奏する研究者。専門はアーツ・マネジメント、文化政策。障害のある人などの多様な背景を持つ人々の表現活動に着目した研究を行なっているほか、ワークショップに関する教育、演劇・ダンスのマネジメントやプロデュースにも関わる。著書に『舞台の上の障害者：境界から生まれる表現』（九州大学出版会、2018年）



文

NPO法人DANCE BOX 事務局長
「こんにちは、共生社会（くちやくちやくのゴチャゴチャ）」
プロジェクト・チーフ

神戸・新長田の劇場「ArtTheater dB KOBE」を拠点に、コンテンポラリーダンスのアーティストの育成事業や、障がいをもつ人や国籍の違う人・地域の人とつくる事業を展開。ダンスと身体、表現と社会、人と地域と劇場が出会い拡張する現場を考え続けている。障害者との活動は、「循環プロジェクト」（～2012）を経て、現在はダンスカンパニー「Mi-Bi」 「やさしいコンテンポラリーダンスクラス」にも伴走中。

障害とアート、社会包摂事業などに携わる各分野の専門家に依頼し、本講座の監修役、受講者の相談相手として本講座に並走いただきました。講座を終えて、監修者のお二人に講座の総評をいただきました。

今回の講座で計画された実践に伴走し、障害のある人が参加する企画を行ううえで、いくつか重要なポイントが浮かび上がった。例えば、ワークショップの出入り自由性や多様性を担保するためには、プログラムの柔軟な設計が求められること。企画の熱量を他者に伝えるためには、関わった人々の思いやプロセスを共有する方法を考える必要があること。ワークショップで生まれる作品が障害当事者自身のドキュメントともなる場合には、それをどのように提示すれば本人の主体性が保たれ、かつ多くの人に伝わるものとなるかを慎重に考える必要があること。地域における文化の担い手と協力し、出入り自由な、その地域ならではのイベントを創出する際には、既存の枠を超えた新しい形を模索する視点が求められること。

ただ、このように考え出された企画や、そこからのポイントだけが重要であるわけではない。受講者たちの高い熱意のもと、今後も引き続いていくことが期待される横のつながりが築かれたことが重要だとつくづく感じる。全国各地に共に赴き、同じ土地の同じ風景を共に感じ、共に語り合うその光景は、提案された企画そのものだけでなく、その先にある未来に向けた光として輝いているように見えた。

表面的に企画をしつらえるのではなく、根本から考えるところに重点を置いていたみなさんの姿が印象深かった。きっと、企画提案に至るまでのグループ内での濃密な対話やリサーチ、他グループの進め方や視点など、どの段階でも学ぶことの多い時間だっただろう。「講座」という形はとっても、一人では実現しえないことを、仲間と共に考える場。その出会いは、これからの社会を動かす動力になっていくと思う。

初対面の人と企画をすすめるのは本当に難しい。仮説であれ、何かしらの理由と必然が必要があってはじめて、「じゃあ何ができるかな」、ということになる。さらに、遠距離で主なやりとりがオンラインだったことのハードルも高かったはずである。

しかし、提案された企画は「こんな企画を待っていた」と思えるものが多かった。今後、その種を個々の現場で発展・実現できるならなお嬉しい。今年度の企画実践編は、神戸に来ていただくことが多く、私が関わるアート、まち、人／組織のつながりの一例も見えていただけたように思う。私自身もより深く各グループの発表のなりたちを共有できた。今後も皆さんと情報交換（や雑談）をしながら、豊かな社会のありかたを一緒に考えていきたい。

事務局より

兵藤茉衣 事務局/プロデューサー

障害と芸術文化に関わる事業に携わるなかで、理解していたはずのものがそうでなかったことに気づく瞬間があります。まさに自分の価値観や認識が揺さぶられる瞬間。本講座を通じて、その驚きや発見を共有できる仲間が多いほど、学びは深まり、広がっていくと実感することができました。同時に、対話を重ねる中で、お互いの認識のズレに気づくことも多く、もどかしくも重要な「問い」に満ちていました。

例えば、「障害者」と言ったとき、それは誰なのか？ 障害者手帳の有無に限らず「生きづらさ」を抱える人と捉える方、自分が「生きづらい」ことに気づいてない人も含まれるので

はないか？ という方も。また、「障害者だ」という偏見で自分を見られるのが怖い。障害者としてではなく、いち個人として認めてほしい」という切実で胸が苦しくなる意見もあれば、「自分はこんなに生きづらいのに、制度上は障害者としての支援を受けられず、障害者として自分を認めてほしい」というお話も。

対話が深まるほど、それぞれのズレに気づきます。それは「自分はどういう意味でこの言葉を使っているのか」を自問し、まだ言語化できていなかった根本的な部分に向き合う機会でもありました。認識のズレを一つにまとめるのではなく、ズレそのものを大切にしながら、自分にできることを始めていきたいと思います。

星菜里 事務局/スクールマネージャー

「舞台芸術表現をひらく」とはどのようなことなのか。芸術をひらくとは何を意味するのか、今回の講座は、改めてその問いを考える機会となりました。

近年、芸術文化の価値を見直す重要性が叫ばれる中で、その解釈や認識は一律ではなく、明確な正解があるわけでもありません。多様な人々に向けた企画、障害の有無を問わない企画が数多く立案されています。しかし、それらの企画は誰のためのものなのか、何を目的としているのか、企画者の自身の視点が絶対ではないということを前提に出来ているか？「見えなく、気づけなくなっていることに気づける余白」を残しておくことの大切さを感じます。

今回の講座では、福祉施設への視察研修を通じて実際に

現場を見聞き感じとる機会はありませんでしたが、その経験をもってわかったつもりや、知ったふりになってしまうことへの危うさも一方で感じました。また、企画をつくるプロセスにおいて企画を届けたい当事者へのヒアリング調査の機会もありましたが、個々の声を聞くことで新たな気づきを得る一方で、その時には聞くことができなかったことにも思いを巡らせた。受講者自身もそれぞれが立ち返る場面があつたのではないのでしょうか。私自身も並走しながら振り返る機会が多く、何度もはっとさせられました。

大きな声だけではなく、小さな声にも耳を傾けることを大切に、「舞台芸術表現をひらく」とは何か、そもそもこの講座タイトルでもある「障害のある人と考える」とはどのようなことを問い続け、何かをするにあたってそれが形だけの取り組みにならないよう努めていきたいと思います。

栗田結夏 事務局/スクールマネージャー

企画実践編の最終振り返りの際、「そもそも『障害のある人と考え』られたのか？」という問いが受講者の一人から投げかけられました。その問いに、スクールマネジメントをしていた私自身も考えさせられました。

今回はあまりみない試みとして、ユーザーヒアリング（企画に参加してもらいたい当事者へのヒアリング）を行ないました。企画立案を机上の空論で終わらせず、当事者が企画の中心にいるための重要な第一歩だったと思います。そこから生まれた企画たちは、とても具体的で、想像が膨らむ面白いものばかりでした。

とはいえ講座としての限界はあり、視察研修やユーザー

ヒアリングで話を伺ったからといって、企画内容を実質的に障害のある人と一緒に考える時間はほとんど取れなかったと言えます。だからこそ、そもそも「障害のある人と考える」とは何か？ という根本的で重要なところに立ち返ることができたのは、講座を行なった意義になり得るのではないかと思います。

特に自分がその障害の当事者でない場合は、社会の当事者として、企画立案者として、どう振る舞うべきか、どう企画を進めていくべきか。言葉でコミュニケーションが取れない当事者とどう共に考えるのか、異なる文化を持つ当事者とどう共有しあえるのか。「障害のある人と考える」ことの難しさと喜びを改めて感じる機会になりました。

ディレクターより、本講座に寄せて

街を歩き、地域を知り、当事者と対話する。
多様な人が協働する未来を描き、
これからの舞台芸術の場の創造性を高めるために

DRIFTERS INTERNATIONAL 理事 / 株式会社precog 代表 中村茜

私は、本事業の運営団体であるDRIFTERS INTERNATIONALの理事であるとともに、アートプロジェクトの企画制作を手がける「precog(プリコグ)」の代表を務めています。2003年に創業し、実験的演劇や舞台芸術のプロデュースを行ってきました。公演先は日本国内だけでなく海外にも広がっています。東京オリンピック2020に向けて、日本財団が主催し開催した「True Colors Festival 一超ダイバーシティ芸術祭」に関わったことがきっかけで、「アートにリーチしづらい人が身近にいたこと」に気づき、アクセシブルな表現の場をどのように実現することができるのか、舞台芸術の現場で様々な取り組みにチャレンジしてきました。



「True Colors Festival 一超ダイバーシティ芸術祭」の様子

本事業は、2023年に引き続き2年目の受託をいただきました。この間、民間事業者に対する合理的配慮の義務化の流れなどもあって、劇場や舞台関係者の中でも、意識の変化もあったのではないかと思います。私自身は、2025年9月13日(土)から11月30日(日)に開催される国際芸術祭「あいち2025」のパフォーミングアーツ部門のキュレーターをつとめており、舞台芸術の創作、あるいは鑑賞を届ける上でのアクセシビリティについて、ますます考えている1年です。



2月26日(水)、国内最大規模の芸術祭の一つである国際芸術祭「あいち2025」の全参加アーティスト60組が発表。障害のあるアーティストを含め、9組とクリエイションを進めている。

この事業の長いタイトル「障害のある人と考える舞台芸術表現と鑑賞のための講座」の中にもあるように、考えていかなければならないポイントというのは様々です。例えば、障害のあるアーティストとともに舞台芸術「表現」をつくっていくプロセスにおけるバリアの問題もあれば、障害のあるお客さまへの「鑑賞サポート」「チケット購入」「来場案内」についてのこともあります。バリアの種類も、ハード面の課題だけではなく、ソフト面の課題もあり、人により、環境により、複雑で多様になります。誰にとっても完璧なアクセシビリティや保障を届けることはできない。必ずズレがあります。だからこそ、障害のある人とともに考え、実践することが大切です。障害者と話すことだけではなく、サポートする側のなか(施設や組織内で)でどう考えているかなどを共有し、マインドを一緒にしておくことがとっても大切だと思います。芯の部分共有しておけば、柔軟に対応していくことができます。それに尽きるのではないかと思います。

また、アクセシビリティについて考えることは、相手への想像力を働かせ、コミュニケーションについて考えることだと思います。同時に、サポートをする側が、障害者の主体性を奪っていないか?ということについても、常に考えておく必要があります。障害のある人が、自ら選択し、主体的に活動する機会を奪わないように。そのためにはやはり、当事者との対話が重要になります。本講座の企画実践編は、対話の場をつくること、当事者から話を聞くこと、実践の場に受講者が自分で足を運ぶことを大切にプログラム設計を行っていました。福祉施設に伺って現場でお話を聞いたり、街を歩いて地域と生活と結びつけながら、複雑さを感じ、包括的に考えていくことが何より重要であると思います。

私たち自身の取り組みも、まだまだ過渡期ですが、本事業を通じて出会った皆さんと、ひきつづき、舞台芸術の現場をより創造的に、豊かにしていくためにともに活動していけることを願っています。



企画実践編 新長田の視察の様子(撮影:阪下混成?)



中村茜

1979年東京都生まれ。2006年株式会社precogの立ち上げに参画、2008年より同社代表取締役。海外ツアーや共同製作のプロデュース実績は30カ国70都市に及ぶ。2012年～2014年、国東半島アートプロジェクト及び国東半島芸術祭(国東半島芸術祭実行委員会主催)パフォーミングアーツプログラム・ディレクター。2019年、True Colors Festival 一超ダイバーシティ芸術祭～(日本財団主催)アソシエイトディレクター兼副事務局長。2020年、アクセシビリティに特化したオンライン劇場「THEATRE for ALL」統括プロデュース。2021年、令和3年度(第72回)文化庁芸術選奨・文部科学大臣賞新人賞【芸術振興部門】受賞。2023年、まるっとみんなで映画祭 in KARUIZAWA 統括プロデュース。2024年、国際芸術祭「あいち2025」のキュレーター(パフォーミングアーツ)に就任。

文化庁委託事業 令和6年度障害者等による文化芸術活動推進事業
障害のある人と考える舞台芸術表現と鑑賞のための講座2024

主催：文化庁、一般社団法人 DRIFTERS INTERNATIONAL
共催：神戸文化ホール(指定管理者:公益財団法人 神戸市民文化振興財団)
企画：一般社団法人 DRIFTERS INTERNATIONAL
制作運営：株式会社 precog
広報：THEATRE for ALL

ディレクター：中村茜
プロデューサー：黄木多美子、兵藤菜衣
プロジェクトマネージャー：星茉莉、栗田結夏
広報アシスタント：土屋梨沙、松本綾香
プロジェクトデスク：齊藤実雪

宣伝美術：LABORATORIES
記録写真：鈴木優、阪下澁成、長末香織

【入門編・オンライン講座】

プロジェクトマネージャー：田澤瑞季、林芽生
プロジェクトアシスタント：西多恵子、箕浦萌
手話通訳：瀬戸口裕子、伊藤妙子
アーカイブ映像編集：内田圭
アーカイブ字幕協力：石川佳音

【入門編・上映会】

上映作品：『旅する身体～ダンスカンパニー Mi-Mi-Bi～』
(2022年/67分)
出演：ダンスカンパニー Mi-Mi-Bi (内田結花、KAZUKI、武内
美津子、福角幸子、福角重弘、三田宏美、森田かずよ)
監督：渡辺匠、志子田勇
製作：TBS

ショートパフォーマンス

出演：内田結花、KAZUKI、福角幸子、三田宏美、も、森
田かずよ、米原幸
音楽：瀬川貴子、日野浩志郎
衣装：福岡まな実
協働メンバー：中村風太
スタッフ：文、眞鍋隼介、新家綾、池本由樹菜(以上、NPO法
人DANCE BOX)
映像：嶋田孝好
手話通訳：久保沢香菜、中村わかな
協力：TBS

【報告書】 編集・執筆：篠田栞 校正：箕浦萌 デザイン：内田圭

【企画実践編】

受講者企画監修：長津結一郎(九州大学)、文(NPO法人DANCE
BOX)
企画発表会フィードバック：岡部太郎(一般財団法人たんぼ
の家)、塚原悠也(contact Gonzo)

視察研修企画協力：特定非営利法人クリエイティブサポー
トレッツ、NPO法人DANCE BOX、NPO法人まる
視察協力(神戸)：廣田恭祐(株式会社PLAST)、岡本正(ユニ
バーサル社会づくり研究所)、小松菜々子(空地文庫)、バク ウォ
ン・趙恵美(スタジオ・長田教坊)、首藤義敬(株式会社Happy)
視察ゲスト(福岡)：添嶋麻里((公財)アクロス福岡 事業部 ディレ
クター)

ユーザーヒアリング協力：たんぼほの家のみなさん(大西照彦、
山口広子、本田律子、河野望、佐藤拓道、大井卓也、中島香織)、放課後
等デイサービスこびあくクラブ第3こびあくクラブ(枝川)のみな
さん(丸目香耶、石川由加)、NPO法人リベルテのみなさん、勝
瀬ほのか(学生劇団「いと」~Italento~)、廣川麻子(NPO法人シ
アター・アクセシビリティ・ネットワーク)、山崎有紀子、福本さくら
ヒアリング協力：半田将仁(可見市文化創造センター ala)